vol. 115

『ゆがめられた目標管理 復刻版』

一倉　定（著）
日経BP
（2020/11）
1,980円

日本のドラッカーと呼ばれた一倉氏。
経営の「目標」に関する内容であれば、
一番に読んで欲しい一冊です。

Book review

【感想】

企業の大型倒産が相次いだ 1968 年。時代の変化を受け、マネジメントの見直しが問われていた時に中小企業の経営者の救世主になったのが、1万社以上の経営指導実績を誇る一倉定氏。 一倉氏による復刻版の第二弾です。

内容は「目標の本質・目標設定・目標達成・目標のチェック、高収益高賃金の目標」など「目標」がテーマになっており、先行きが見えない今だからこそ、すぐれた目標を立てるには必要不可欠の考え方です。

アイリスオーヤマの大山会長も推薦していますが、半世紀前に書かれた本なのに、最近書かれた本でないかと錯覚するほど、今の時代に経営の指針を示してくれる一冊です。
時代の変化に　左右されない、経営の本質を突いている所以だと思います。

【以下引用】

・企業の目標は、生き残るための条件が基礎となるということである。そして、企業の運命は基本的に客観情勢にどう対処するかできまってしまう。当然のこととして、企業の目標は、客観情勢に基づいて設定されるのであって、企業の内部事情とは本質的に無関係である。
・きびしい現実は、「これだけはどうしてもやらなくてはならない最小限度の事柄」のほうが、「できうる最大限度の事柄」より大きいのである。「企業があげうる最大限の利益」は、「企業がどうしても必要とする最小限の利益」よりはるかに少ないのが常態なのである。
・企業の幹部の態度として最も大切なものの一つは、経営者の役割は未来事業にあることを理解するとともに、その難事に思いをいたし経営者にいらざる内部の心配をかけないことである。
・（目標の）明文化によって、はじめてトップの意志が基本的に誤りなく社内に浸透する。これこそ最も重要なコミュニケーションなのである。
・「長期経営計画をたててみて、私がいままで頭の中で考えていたことが、いかにあまいものであったかということを思い知らされた。私はもう、社内のことをあれこれいうことはやめます。社内のことは、目標を与えて、いっさいを常務に任せ、私は新事業の開拓に専念することにきめました。いや、そうせざるをないことが、わかったのです・・・・・」

・目標よりも日常の仕事のほうが優先してしまうのが、むしろ自然だ。
定期的にチェックしないのならば、目標など設定しないほうがよい。

２月からスタートする古田土経営塾 2021 年版では「一倉定の社長学解説シリーズ」として一倉定先生の教えを現代の経営に置き換えて古田土が解説いたします。